

幻覚がゴジラがないので漫画を描けとか言ってくるので悩んでいる

袴紋太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻覚がゴジラという特撮怪獣を主題とした漫画を描けとか言つて
きた
なんでそれが入賞した挙句、連載スタートしてるんですかねえ

目 次

幻覚がゴジラがないので漫画を描けとか言つてくるので悩んでいる

アニメ化とマジっすか	5
J Cが弟子入り志願しに来て怖いんだけど	8
行動力ありすぎるよこの子…	12
掲示板と派生の可能性	15
楽しくなければ書けないって話	19
掲載する雑誌を選ぶ権利	24
漫画界の闇!	28
自分の作画と相手の作画	34
仕事納めは焼肉がいい	37
最後までやるのが筋だ	42
いきなり消える奴がいるかよ	45
とりあえず、見ますお隣さん	48

幻覚がゴジラがないので漫画を描けどか言つてくる
ので悩んでいる

目の前の半透明な男?らしき物体が喚きだした。

引越しバイトのシフトを多めに入れたのが仇になつたか、まさか幻覚と幻聴に悩まされるとは。

自室のPCを操作し、それを横から覗き込む幻覚を疎ましく感じながらも趣味のWEB漫画を描いていく。

んだよ、なあ返事しろつて』

主人公に襲いかかる強大な怪物のデザインが浮かばず、ストレスが溜まっているのだ。

まず、そう…暴力的で、ひたすらにタフ。

口からは炎を吐き、情け容赦のないまるで天災…

『それもうエシテでいいじゃん』

なんたよ、シテて鮭の仲間かああん？

『だからゴジラ、ゴジラザウルスっていう恐竜の生き残りが水爆実験で巨大化して人間に襲いかかるんだよ』

•
•
•

：幻覚の癖に設定とかあるのか、続けてどうぞ。

『その為にはまずゴジラについて語らねばならんな』

た。 どこその学者の如く踏ん反りかえつて
幻覺はヘラヘラと語りだし

ゴジラとは、特撮怪獣映画として長きにわたって人気を誇っていたシリーズ作品であること。

だというのにこの世界?では、ゴジラのゴの字もない、それどころかまともな怪獣映画が存在しない。

嘆かわしい、この姿ではどうすることも出来ないのが悔しくて堪らない。

そういうつた前置きを聞き流すも、語られた設定は斬新な内容だった。昭和、平成と世代ごとに「ゴジラ」という怪獣の設定は移り変わった。

水爆実験の被害者。

最強の生物。

地球という惑星が生み出した兵器。

息を呑む、とはこの事なのだろうか。

ハリウッド化（幻覚は別物、ジラは絶許だそうだ）したとまでれば、世界的にも評価された映像コンテンツ。

しかし、そんな物は見たことも聞いたこともない。

ネット検索してもそれらしき記述はない…やはり自分の妄想なのだろうか。

『ゴジラもモスラもガメラもないとか、この世界終わってるわかあーかあー』

しかし、話を聞くだけでも面白そうだ。

精神科にかかるまえに、この幻覚から得た情報を創作として出力するのもいいかもしれない。

『え? ゴジラのデザイン? まず二本足で肌がケロイドみたく黒く

て~』

おかしい、どうしてこうなつた。

「では新人読み切り枠として掲載されるから、細部の調整よろしく」菊瀬と名乗るこの人物、なんとあの週刊少年ジャンプの編集者の人である。

見た目冴えないおっさんで、切り込みも厳しいが言うこと言うこと正論なので余計キツイ。



『ふつ、ゴジラシリーズを書ききるにはまだ実力不足だがな』

ええいうるさい、1年経つてもまだ消えないのか。

1年前、この幻覚からデザインと設定を聞き出しWEB漫画として投稿すると評価が格段に上昇。

以前のは絵は上手いけどシナリオや設定が陳腐だという書き込みに、何度も心折れたことか。

しかし、個人的にも漫画を書くのが楽しかったので試しに新人枠の募集に応募してみたら大当たり。

そこからトントン拍子でここに至る、なんだこれは何処から妄想だ。

「で、だ…これ主人公が毒？爆弾で怪獣を道連れにしてるけど次の構想はあるのか」

菊瀬編集の質問に対し、今後は人間、ゴジラ、それ以外の怪獣という構成で作っていくことを話した。

ガイガノン、ラドン、キングギドラ、ほかにも数多くある魅力的な怪獣達。

それを活かせる技量があるのか、ただのフリーテーでしかない自分にそれが出来るのか。

『でも漫画だから仕方ないとはい、人間の主人公がいなきやいけないのがなあーあと機龍の設定どうするかなー』

少し黙つてろ幻覚。

「怪獣を倒す組織のいち戦闘員が、現場と読者によるメタ視点交互に怪獣との戦いを描写すると」

あとはそれっぽいロボットだつたり兵器だつたりと、こんな感じでして。

「もうほとんどデザイン出来てるのかよ…とりあえず、内容次第で連載するかどうか決まるから」

出来れば作家さんのアシの仕事紹介とか無理ですかね。
「グイグイ来るなお前…考え方よ、結果次第だがな」

よろしくお願ひします。

集英社からの帰り道、幻覚の声が虚空に響く。

『売れるのは確定として約束忘れるなよー、売上は7が特撮化への仕込み、3が報酬だからな』

売れたらな。

まあ、いい夢は見れた気がする。

就職、頑張らなきやな。

『漫画家だろてめー』

一生食えるわけじやないんだ、貰った知識とアイデアで威張れるほど厚顔にはなれないよ。

点滅する街灯の下、幻覚との対話というあまりな姿を見られぬようそそくさと帰宅した。

そして読み切り掲載後、暫くして：

「来月から連載スタートだ、アシスタントはこっちで見繕う」

どうしてこうなった。

アニメ化とマジっすか

嘘だろおい、人気投票トップとか普通そはならんやろ。
『なつとるやろがい！』

「ゴジラ／怪獣王」のタイトルで執筆を始めたのだが、予想を大きく上
回り人気に火が付いた。

ジャンプの表紙をデカデカと飾り、単行本は発売してすぐに在庫切
れ。

電子書籍つてこういう時便利よねえ。

『わーはつはつはつはつはつは、ゴジラの魅力に取り憑かれた時点で
勝ち確よ！』

わあいファンレターの山、返事どうしよう。
で、映画つて特撮…というか実写だろ?
何処にどうすればいいわけ?

『馬鹿だなあモブ太くんは』
やかましい。

『そういうのは詳しい人に聞けばいいじゃないか』

…それもそうか。

そもそも、人気なんて今だけだし逸り過ぎか。
よし！ 今日は牛丼特盛で卵もつけるぞ！

『やつすいなあ、お前』



読み切りから連載開始というのは、実は非常に稀だ。

漫画雑誌というものは、その性質上読者からの人気によつて引っ張
り上げられる。

どれほど技量があろうと、シナリオが秀逸であろうと、読者の関心
を惹かなければ意味がない。

今週号を手にとつた男は、自宅でページを捲っていく。

「怪獣王ゴジラ、敵対する怪獣、人類の戦い…」
技量はある。

設定も悪くない。

登場する怪獣はどれも手強く、キーとなるゴジラは人類の天敵。人類の科学力を結集して生み出された兵器は時に爆散、時に活躍、時には怪獣を打倒する。

だが誰もが好むかと聞えばそれは否だ。

対象はほぼほぼ男性に限定される、戦闘が多いタイプなのでさらに絞られるだろう。

沢山の人楽しめる作品とは言い難いものだ。

これは自分の求める作品とは絶対に違う。

：だから、菊瀬編集の言葉は、どうでもいい。

【男か、女か、少年か、大人か、誰に向けたものでどんなテーマがあるのかサッパリだ】

【こいつを応募した作家は、怪獣が好きな男性向けとして描いてるとハツキリ言つたぞ】

【お前何か勘違いしてないか?】

どうでもいい。

どうでもいい。

どうでもいい。

ボツ扱いされた原稿を机に置いて、新作を描くためペンを握るのだ。

何が悪いのか理解出来ない男は、事実に目を向けることなく陰鬱な日々を過ごしていた。



「今季の冬アニメ、梓取れたぞ」

マジっすか。

菊瀬編集からの電話で集英社に駆けつけた矢先、いきなりアニメ化の話が出てきた。

早すぎません？

「SNSやツイッターでも盛り上がってるからな、話題性にアニメ会社も乗つかるそうだ」

『実写化に一步近づいたな、進撃○巨人もやつたし余裕余裕』

マジっすか。

つか幻覚うるさい。

「でだ、作家本人から何か要望あるか?」

アニオリでゴジラが歩み寄る的なそれはやめてください、解釈違い
なんで。

声優? いやそういうのは別に自由にて。

あ、可能なら特撮とかやつてる人たちと渡りつけたいつす。

実写映画希望なので。

「実写あ? だいたい外れるだろそれ」
約束なんで。

『分かつてるじゃないか!』

ええいうるさいよ幻覚!

「んじゃさつきの条件だけに注視してそれ以外は自由にと」
当たるといいつすね。

「そればっかりは俺らじや口出しすることしか出来ねえよ」
うつす。



「先生! 私をアシスタントにしてください!」

家に帰つたら女子中学生から弟子入り志願された。
どゆこと?

J Cが弟子入り志願しに来て怖いんだけど

えーはい、えっとまずお名前は?

「藍野伊月です、高知から来ました!」

はあ、カツオ美味しいよね。

『やべーぞこのJ C、圧がすげえ』

勢いに乗せられて部屋に入れちゃつたし…ねえ。
と、とりあえず、緑茶でいいかな。

「お構いなく! というか私が淹れます!」

いやいや、お客さんだし…やばいよやばいよ、なにこれパパラツチ
の手先?

怖いよ怖いよ、なんなんこの状況。

頭が恐怖に呑まれるのを耐えて、緑茶を三人分淹れてしまう。
しまつた、一つ多い。

『は?俺の分やろがい!』

幻覚にお茶出しどかアホじやねえの、最近やつてるけど。
えつと、とりあえず大福でいいかな。

ソファの対面に座る藍野さんと向き合う、一息ついてから口を開く。

弟子入りって、お:私に?

「はい!」

「ごめん無理。

「ええ?!」

意地悪で言つてるわけじゃないから、一応聞いて欲しいな。

まず君は中学生…だよね、何年生?

「三年ですから卒業すぐです!」

受験シーズン真つ只中じやないか…

というかどうやって住所を…

「ネットやら聞き込みやらで調べました!」

『やべえぞこいつ』

怖い、怖いよ…とにかく全力で断らなきゃ。

弟子入りの話だけど、まず前提を出させてもらう。
つまり最低限のラインだ、いいかい？

「…はい」

まず、義務教育をちゃんと修了させてから来なさい。
これは法律の問題だからね。

それと親御さんの許可を取つてから言いなさい。
未成年の女の子だ、きっと心配しているよ。

「分かりました」

分かつてるのかなあ（汗

『おい、大丈夫かおい』

今だけは黙らないでくれ幻覚、クモの巣張った脳味噌フル回転させてるから。

で、うん：弟子入り、そう弟子入りだ、何で私に？

「先生の作品を読んで、なんというかここ数年にないオーラのようなものを感じたんです」

「私、漫画描いてて：その、プロを目指してるんですけど……）、これ、
読んでもらえませんか！」
ほほう、どれどれ。

まあ所詮J Cのアレやしなあーとタカを括つていたのだが、「ホワ
イトナイト（仮名）」と書かれた内容に
『なんやこのJ C、バケモンか』

幻覚ともども圧倒された。

まだまだ荒いところはあるが、ストーリー構成から演出、設定、ど
れも完成度が高い。

えっと、これ本気で君が書いたの？

「はい！」

：道具渡すから試しに書き書いてくれない？

「お借りします！」

「出来ました！」

誰かから借りてきたとかそんなオチだろうという安い願いは、眼前
の天才による速筆によつて叩き潰された。

1ページだけのつもりが、まるまる1話分描かれてしまった…どうしよう。

なるほど、実に素晴らしい出来だ。

才能がある、今度何かのコンテストで出してみるといい。

おっほん、えーえーえーえーえー…………まず条件を言い渡します。

1、せめて高校くらいは入る事、中卒だと世の中大変だからね。

大卒でも結局は就職難のフリーランスになるのさ…

2、君の書いた作品で何かしらの漫画コンテストに応募して入賞すること

結果次第で他のとこ行くやろ。

3、直接来るのは問題だから Skype通話などでのみ参加しなさい。

アニメ化したら色々整理しなきや…

以上の三つだ、それが出来なきやこの話は無しだよ。

「卒業、入学、説得と入賞：分かりました、 Skypeはそれ以外全て終えてから連絡を入れさせてください」

ははは、期待しているよ未来の漫画家さん。

周囲を一瞥してからそつと帰らせ、急ぎ物件情報を探しに不動産屋へと向かう。

急いで住所変えなきや！

『また特定されそうだな』

ホラージゃんよ!?

◆◆◆

見なくともいいキャラ設定

「主人公／ゴジラ作家」

絵の技量云々は高いが、設定やシナリオが陳腐、面白い原作者と組めば強いタイプ。

突如として出現した幻覚から「ゴジラ」の設定を聞き、趣味のWEB漫画に投稿。

何故かそれがヒットして色々驚いている日々

「幻覚／幽霊？」

ゴジラ大好き野郎、ゴジラシリーズ完結からシン・ゴジラを見てアニメを見て自作の着ぐるみまで作った。

実物を着込んでいるとき、住んでいたアパートの隣部屋から出火して火事に巻き込まれて死亡。

その後、気づけばゴジラ作家の背後霊となり溜まっていた鬱憤を晴らすこと。

お供え物的なフイーリングでなら飲食可能

行動力ありすぎるよ」の子…

「春アニメでシーズン2入るぞ、あと夏には映画化するからそれ用のシナリオ頼むわ」

嘘だろおい。

雪解けから春の兆しを待ちわびてている所に、菊瀬編集からいきなりの爆弾発言。

どうやらアニメも好調だつたらしい、印税うまいっすわ。

『特撮業界の監督さんとかも見てねえかなあ』

そつち方面まだまだ全然だからな、焦るなよ幻覚。

『そろそろ認めちまえって』

ええいうるさいうるさい。

しかし映画かーちとペース早すぎないっすか？

「それだけ期待している人間が多いんだよ、作品の人気つてのは単純に面白さだけじゃない」

「流行りだから、周りも知ってるから、ネットやテレビで見た、まず最初に興味を惹か抜きや始まらないんだよ」

「ファンが増えればアンチも増える、その結果知名度が上がつて次のステージに登る、この繰り返しだ」

なるほどねえ…ん？ なんすかその原稿。

「可燃物」

そりや紙は燃えますわ。

「…お前これ読んでみろ」

渡された原稿をペラリペラリ…ううん、言っちゃ悪いけど。

『つまんね』

ああうん、こんにゃくをそのまま切り取つて皿に出されたような味
氣なさ。

何がしたいのか、何を伝えたいのか分からん。

「何度も描いては持ち込んでくるんだが、いい加減ウンザリだ。漫画に限らず創作物つてのは何かしら傾向やら特色がある」

『「何もない」、空っぽだ』

よくある展開、演出、それを使うことは間違いないじゃない。

斬新なアイデアを出せるのは才能だ、しかし使われてきた技法を用いることが間違いか？

器が同じでも中身が変われば品は変わる、要はどう使いこなすか。

70億人もいる人間が、百年以上も重ねてきた漫画という概念。

斬新なネタなんてそうそうありはしない。

『つーかこんな読んでもつまんないモノ、書いてて楽しいんか？』

漫画の最初の読者は書き手である。

漫画家という職業故、売れる漫画を書くのが最前提。

しかし自分が楽しいと思えない作品を読んでもらいたいというのは、何処か違う気がする。

この人とは合わなそうっすわ。

「アレと意気投合できる奴がいるかよ、どんなつまんない人間だ」



「中学卒業して東京の高校合格しました！ 春から一人暮らしです！」

『マジかよこいつ』

嘘だろおい。

帰り道、ス○バでくつそ長いラテでも飲もうかと思案していたら、藍野ちゃんと遭遇。

あれだけ濃いと忘れられないなあと口元を引きつらせていた所、何故かファミレスで相席。

先ほどの発言にあわせて、「ホワイトナイト」がある漫画コンクールにて最優秀賞を取つた事を知らされた。

スマホで調べれば嘘だろおい、集英社が絡んでるじゃんやべえよこいつ。

『おい、条件大半クリアしてんぞこの女』

嘘だろおい。

OKOK、落ち着こうじやないか。

受賞だけでも凄いのに、最優秀賞とは凄いじやないか！

「えへへ、ありがとうございます」

照れる様子の彼女は言うまでもなく美少女だ、通報されるかもといふ思考を脳の隅へ。

う思考を脳の隅へ。

それでも凄い行動力だ、だからこそ問わねばならない。

藍野せん
どうして私なんだい？

デビューしてすぐの、コネも何もない私の元で何がしたいんだい？

全人類を楽しませる漫画が描かれています。

……えーと?

「何言つてんだこい」

藍野さん——厳しいことと言はば、それはせつて、厳しい

間の属性は、二三の事項に付するものとす。

のまざりえなハ。

だから私自身は不可能だと言おう、私には出来ない。

「… そう、ですか」

ても目指すのは君の自由だ

原指し

ムロツノシタニシテアハシテ

「……は、藍野伊用は全力で先生をサポートし

やります！」

「ええんか」

目的はなんだろうと目指すのは自由だし、それに向かって努力するのは健全じやないか。

それに思春期だよ？
そういう年頃なんだから否定するのもアレ

じやん（遠い目）

約束は約束だし、一応ねえ？

掲示板と派生の可能性

637匹切りの怪獣王
アニメ三期決定！

638匹切りの怪獣王
そりや（国外興行収入120億突破すれば） そうよ

639匹切りの怪獣王
海外の評論家「モンスターキングは世界に通用する可能性を秘めた
コンテンツだ」

640匹切りの怪獣王
BGMがいいよね、あれ作者が考案なんだつけ？

641匹切りの怪獣王
マジでか

642匹切りの怪獣王
音楽もいけんの！？

643匹切りの怪獣王
違う、作画修正で鼻歌やりながらしてたのを作曲担当が完コピした

644匹切りの怪獣王
作者「ゴジラを書くときはこれが頭の中で響く」

645匹切りの怪獣王
怪獣王は作者に漫画を書かせていた！？

646匹切りの怪獣王
あながち違うとは言い切れない

647匹切りの怪獣王

いいよねあのBGM、勇壮かつ強大な敵であり大自然の驚異つて感

じ

648匹切りの怪獣王

今回の宇宙からきたキングギドラVS地球の怪獣王の対比が美し
かつた

649匹切りの怪獣王

どつちが勝つても地獄である

650匹切りの怪獣王

戦術チート指揮官「勝ったほうが我々の敵になるだけです」

651匹切りの怪獣王

それな

652匹切りの怪獣王

それな

653匹切りの怪獣王

それな

654匹切りの怪獣王

つか作者若いっても体良く持つよね、取材旅行で南極行つてきた
ばつかじやん

655匹切りの怪獣王

作者「南極の氷見て犬ぞりしてきました」

656匹切りの怪獣王

体験主義者というか、そこらへん遊びじゃなくてガチの取材なんだ
よなあ

657匹切りの怪獣王

でも犬に餌やつてる映像ニュースで出てたけど、楽しそうだつたよ

658匹切りの怪獣王

クレバスで落ちかけた犬引つ張り上げたんだよなあ

659匹切りの怪獣王

お前それサバンナでも同じ事言えんの？→サバンナ行つてくるわ
(作者→大変やつたわ(動物たちのスケッチ片手に、乾いた血がついて
る

660匹切りの怪獣王

カバに襲われたんだよなあ

661匹切りの怪獣王

カバが一番やばいってそれ作者もツイートしてた件について

662匹切りの怪獣王

でも休載せずにやるのは偉い

663 四切りの怪獣王

現地でも書いてるし、一ヶ月分は先に書いてやうらしいよ

664 四切りの怪獣王

ツイート見たわ、エベレストはすぐには無理なのでとりあえず富士山登つてくるつて

乙巳四月の怪體王

今度の舞台はエベレストか（）

スマホで覗いた掲示板、やはり映画化は違うなと私は息を呑んだ。

東京は地元の高知と比べても人と物も窓から都会の喧騒と、うものを見下ろす。

「やつぱり、先生に弟子入りして正解だつた」

だ。

日本、世界と駆け足で影響を広げていく怪獣王ゴジラ。

それを三か月の分の名前は
親間に二二ノテソリと燃矛的は

人の心をつかむモノが、ゴジラにはあるのだと改めて確信した。

劇場版の発表会に出演した時の一言。

思つた。

「シテほど実写化が合う漫画はない」アニメ映画も良いからCGなどわせればむしろ実写版の方がイメージに添うだろう。ペラリ二、風こよつて書きかけの原稿が力くれる。

ホワイトナイト、主人公と仲間たちの冒険活劇。

私の処女作であり、先生に認められた作品

全人類を楽しませる、つまりそれは「読者」を「選んではいけない」

のだ。

書き手の癖、作画、シナリオ、どれも漫画を構成する重要な部品。読者が分け隔てなく楽しめ、興味を持たねばならない。

故にホワイトナイトは目指すべきものではない、無いのだ。

富士山に同行して疲労と筋肉痛から執筆を中断していたが、そろそろ書かねばならない。

ホワイトナイトを超えるもの。

ゴジラに続くもの。

私の新作、藍野伊月渾身の漫画を。

でも何故だろう。

どうして私は、これを読んで…

「つまらないと思っちゃつたんだろう」

どうして?

◆◆◆
エベレスト登頂を目指すと言つたら編集に怒られたでござる。

『いや普通行かねえよ、危ないじやん』

いやだつてシナリオも設定も幻覚の発言じやん、だつたら作画やりアリティを追求しなきやじやん。

『職人かてめー。とにかく実写に大きく近づいたな!』

今更ながら夢じやないのか、今自分は病院のベッドの上ではないのか。

まあとにかくアッシリーズには今回付き合わせちゃつたし、なんか美味しいの食つてもらうかあ。

何がいいべ、焼肉?

『てめえ俺が食えないのに…そういうえばスタッフの一人がまさか! つてのを持ってきたなー』

ああ、アレな。

ウルトラマンだつけ、作画鍛えればヒットすると思うよねえ。

巨大なヒーローがいるなら人間大のヒーローもいいよね、改造されて…そう、バイク! バイクに乗るんだ!

『それなんて仮面ライダー』

・

楽しくなければ書けないって話

「アニメ映画第二弾だ、これが受けければ実写化の話が本格化するぞ」
嘘だろおい。

昨年の映画化からすぐに映画化とは思わなかつたぞ。
しかし疲れてますね菊瀬さん。

「…そう見えるか」

うつす。

『なんかミスでもしたんかおい』

「…近々、お前の担当から外されるとと思う」

あれま。

色々と理解がある貴方が外れると面倒なんですが。
なんです、週刊誌に激写されました？

「編集の顔なんて誰も撮らねえよ…才能ないと思つてたのが、とんでもねえもん持つてきてな」

「それが編集長の目にとまつて、後はまあ完全に俺が無能だつて空氣で会議が進んだ」

ええ…それはちょっと無理があるんじや。

「来週号で読み切りが出るから見てみろよ…じゃあな、お前との仕事は楽しかつたよ」

力なくデスクから離れる菊瀬編集の背中は、随分と小さく見えた。
どう思う？

『まあ才能開花つて話だろ？ それにしてもたつた一つだけで無能扱いってのは違うね？ ゴジラの編集ぞ、神の御技ぞ』
だよねえ。

…業界厳しいわあ。

◆◆◆

「先生！ これ読んでみてくれませんか！」

あいよ伊月ちゃん、今更だけど名前呼びになつちやつたねえ。
で、新作？ ホワイトナイト地味に楽しみにしてたんだけど。

「はい！ これが私の新作——ANIMAです」

おつし、アツシーズ休憩入れるべ。

—藍野ちゃんの新作つすか』

「木戸れいこさんの児童画かな」

どうか先生の作り込みがハイヤーなんすけど
まあまあ、また今度焼肉奢るから。
んじやま、読ませてもらいますかねえ。

10

「す」
二
二
二

「うれし」

ん
面白
いね
これ。

作画やシナリオも特上、さらにキャラ描写が秀逸だ。

これ今出しても連載行けると思うよ。

おいかどハシノリレーベル。

喜びを歯み締める伊用ちゃんには悪いが、これは固人の惑想なの

だ。

面白いよ、うん、もしかしたらゴジラも超えてしまふかもね

「……」
「どうしてですか

その前にアッシーズにも聞きなよ、読者は多いんだからさ。

「僕はこつちが好きですね、技術の向上が見て取れるし癖がなくて読

ニヤリ

て感じが好き!』

最後は要らないよもう！

ん、伊月ちゃん、これは技術とかそういうのじゃなくてさ。

これ書いてて 楽しかった?

「…いえ」

これ読んで、面白かった？

「……いいえ」

作家のポリシーとかそういうのは特に無いんだけどさ。
自分が面白いって思えるものを出さなきや、ちょっと違う気がする
ね。

勿論、そういうものを抜きにして書くのも仕事さ。

だから何が悪いとかじやなく、個人の感想でしかないよ。

『誰が読んでも面白いな、これ』

『でもきっと、誰が書いても同じだぜこいつは』

『再現出来るか否かを解決出来れば、きっと誰にでも描ける』

「…先生」

うん。

「私、弟子入り志願に来たとき、言いましたよね。全人類が楽しめる漫
画を作りたいって」

『言つてたね（ガチだつたか…）』

「未熟、でした。先生のようにはいきませんね」

伊月ちゃん。

「で、ですけど、これからもそれを目標に！ ANIMAよりもっと
！」

泣きそうな顔で、それ言つちゃダメだよ。

作り手が、自分の作品を否定しちゃダメだ。

自分が本気で書いたのを、自分で投げ捨てちゃ悔いが残るよ。

「でも！ ANIMAよりホワイトナイトが好きだつて感想が出
ちゃつたじやないですか！」

「ANIMAじゃ、理想には届かないってことじやないですか！」

ねえ伊月ちゃん、君の理想の漫画つてどういうものだい？

「書き手の癖も、思想も、作家の「個性」です。個性の出る漫画にはど
うしても合わない人が出てしまう！」

「それじや意味がない、もつと客観的に作らなきや
無理なんだよ。」

客観的ってのは、要するに他人の主観なんだ。

自分以外の主観が集まつて、客観的と呼ぶんだよ。

伊月ちゃん、漫画の一番最初の読者は作者だ。

個性が入らない作品というのは、全人類70億全ての「主観」を統合して初めて作れるものだよ。

「……………あ」

うん、無理だよね。

だからさ、せめて楽しく書こうよ。

「たの、しく？」

うん。

「無理ですよ…」

どうして?

「空っぽなんです、私…中身がない、技術ばかりあつて、作品に込める想いもない、漫画家失格の」

でも君の漫画は面白いよ。

「ぶつちやけ、ゴジラ無かつたら僕は藍野さんの所で仕事するね」

「読んでてワクワクするし、満たされる作品ってのは十分だと思うぜ」

「…………ウルトラマンの方がおもしれーし」

もうJKに対抗心燃やすなつて。

俺はさ、ゴジラ書くの好きだよ。

グッズとかアニメとか、売れまくりつてニュース出たらにやけちゃうよ。

読者がワクワクして考察して二次創作とか考えたらもう最高！
MADとか見てるだけで時間が過ぎるね！

「……私も、ゴジラ好きです」

ありがとう。

中身が無いなら、これから注げばいい。

伝える意思も、これから作つていけばいい。

焦ることはない、なにせ人生だいたい百年はあるんだから。

よおーしあツシーズ、とりあえず焼肉行くかー

これから正式に4人目のアシスタンントの歓迎会だ、酒はあかんぞ！

「「ええええええええー——————!?」」

おやかましいわ！
創作活動は楽しんでなんぼ。
それでええやん。

「——はい！」

掲載する雑誌を選ぶ権利

「今週号のゴジラも面白いですよ！ ますます先生の筆も脂がのつて」

具体的に何処が面白いのか言つて欲しいなあ…

「あ、いえ、そんな、自分なんかが…」

いいのいいの、編集者と作家なんだからイーブンだよ…あ、これオフレコで。

菊瀬さん、どうなん新人くん。

「腫れもの扱いですよ、編集長が目に見えてアレみたいな感じにしちゃつて」

それなんで自分がゴジラ担当にしてもらえたと、若い編集は複雑だとばかりに苦笑している。

新作、ねえ。

伊月ちゃんが言つてこないから無視してたけど、ううん。

「『ホワイトナイト』ですよね、いやあー遅咲きつて程じゃないけどあんな才能あるんですねえ。いつつも菊瀬さんからボロクソ言われてた記憶があるけど

そつかーホワイトナイトかあ

『いつからジャンプはパクリ有りになつたわけよー』

うーん…新人くん、悪いんだけど今週号の人気投票、出たら確認しててよ。

「分かりました！」

さて帰るか…幻覚に尋ねるつて自分の頭が心配になるんだけどさ。

『お前マジですか…』

マガジンとサンデー、移るならどっちにするべ。

『サンデーはない』

◆◆◆

では伊月ちゃん含めアッシリーズ、改めて今週号を買つてきましたが。

なんでホワイトナイトあるの？

「「盗作だーーーーーーーーーー！」」

だよねえ…いやーまずいっす。

結局5話分まで何も言わなかつたけど、これ伊月ちゃんの作画だよねえ。

伊月ちゃんがこつそり出してるってのは…

「いいえ、そんな記憶ありません…私が書いたのとは細部が違うけれど、ホワイトナイトです」

『編集え…』

うーん、大事になる前に鎮火させたいなあ。

下手したら飛び火して実写化がポシャる。

コンクール受賞品なんだし、意図して無視してるとは思えないんだけどなあ。

となると、アマチュア作だからそもそも知らない…かなあ。

まずいよまずいよ、不味すぎて吐くよこれ。

「…」の佐々木という人、僕知つてますよ

そうなん？

「菊瀬編集に何度も持ち込んではボツ食らつてた人です、試しに読ませてもらつたけど酷い内容でした」

……ああ、たぶん読んだかもしれない。

作画、違います？

なんというか、個性が全然出でない。

「藍野さんが書いたのをそのまま出したつてのがシックリくるなこれ」

「コンクールの原稿そのまま抜き出してきたんじゃ」

黙つて読みふけつてた伊月ちゃんに視線を向けると、眉を八の字にしている。

「『私』のホワイトナイトです、間違いなく…構成や表現も、私のだつて分かる」

どうしたもんかねえ。

正直、掲載先が変わるのは別に良いんだけど。

知り合いも増えたし、まあなにより義理があるしね。

「先生…」

ん?

「先生は、盗作そのものには何も言わないんですね」

(俺も似たようなものなので) 言えない、かなあ。

例えそうでも問題になつてないのなら、これも仕事だよ。

惜しい、と感じるのは…うん。

なんでこの人は“自分”的ホワイトナイトを書かなかつたのかなあ。



「また、2位…!?」

アパートの自室にて今週号の読者投票の結果、ホワイトナイトは2位。

1位独占は言うまでもなく、ゴジラだ。

俺：佐々木哲平は奥歯を噛み締め、瞑目する。
売れない作家、そもそも作家ですらない自分。

25になる後のない自分。

何度出してもボツとされる現実。

落雷によって10年後のジャンプが送られるタイムマシンとなつた電子レンジ。

その中の【ゴジラのないジャンプ】で一番人気のホワイトナイト】を、俺は模写し持ち込んだ。

未来の人気漫画という可能性を踏みつけて。

今まで俺の漫画を没にし続けた菊瀬編集の意見を押しのけ、こうして連載を獲得してしまつた。

俺には、未来の人気漫画を潰した責任がある。

だからこそ、ホワイトナイトを世に出す使命があるんだ。
そう、自分に言い訳して…

こうして毎週来る未来のジャンプに掲載された「ホワイトナイト」を模写している…
なのに。

「どうして…」

なのに…

「ゴジラを超えない…!?」

背負った十字架が、のしかかる。

愕然とする中、携帯に着信が入る。

編集部からのそれに、言いようもない不安感を感じるのであつた。

漫画界の闇！

とある一室、そこには俺と伊月ちゃん、編集者達、そして…

「『要件は、なんでしょうか』

顔色の悪い佐々木氏だった。

大丈夫？ とりあえず水いつぱいどうぞ。

「はあ、貴方は…」

ゴジラ書かせてもらつてるもんです、こつちはアシスタントの人。

まあ長々と話すのもアレなんで、单刀直入にいかせてもらいますが。

佐々木さん、「ホワイトナイト」が盗作だというのはご存知…ですかねえ。

「…ツ！」

強ばつた表情に、血の気が失せていく様子を見てため息が吐きたくなつた。

少なくとも本人は完全に黒じやん。

「そ、その、何故貴方が、関係ないじゃないか！」

『見苦しい…』

いえ、関係があるのはこっちの…

「はじめまして、藍野伊月と申します。学生ではありますが、アシスタントとして先生の所でバイトさせてもらつてます」

「アイノ、イツキ…!？」

愕然とする佐々木氏、伊月ちゃんもこれ結構キてるなあ。

「ホワイトナイト」は藍野さんが漫画コンクールに出展し、最優秀賞を受賞した作品です。

この時点では著作権が成立し、貴方はその権利を侵害、不当な利益を得たとして提訴する予定でした。

しかし、ご両親が未成年である彼女の将来に悪影響を及ぼすのではと危惧された為、関係者を集めて話し合いの場を設けさせて頂きました。

今回、私は高知にいらつしやる藍野さんのご両親の代理、雇用主と保護者として参加させて頂きます。

『え、なにお前方チじやん』

ガチだよ、色々と。

「まあ、そういうわけとしてね佐々木先生…我々もこの一件に関しては共犯者ですからねえ」

「藍野さん、確認を怠り貴女の作品を盜用してしまい申し訳ありますんでした…！」

菊瀬編集を除いた編集者たちは、編集長と共に伊月ちゃんへ深々と頭を下げた。

佐々木さん、本件に関しては以下の条件を被害者側は提示します。

- ・三百万円の賠償金
- ・「ホワイトナイト」の連載を即刻停止
- ・関係者への説明

「ホワイトナイト」で得た全ての利益を藍野伊月に返却する

「そん、な…」

というのが、当初の条件だつたのですが。

藍野さんとも話して、色々と変えることにしました。

端的に言えば、貴方にはこれからホワイトナイトの『正式』な作者になつて頂きます。

「僕が、ホワイトナイトの」

賠償金1千万、藍野さんに對して支払うのであればホワイトナイトの著作権をお譲りしましよう。

人気低迷による打ち切りをさせず、1年以上の執筆にて完結させるのであれば三百万に減額。

その後ホワイトナイトによる全利益の内、約半分を藍野さんに譲渡する。
賠償金、利益返却を除き藍野伊月とその関係者に對して一切の接触を禁ずる。

この提案を呑んでいただけるのであれば、この一件を手打ちとする
：如何でしょうか。

「あ、貴方は漫画による問題を金銭で解決するのか?!」

そうです、それが最も円満に解決出来る手段であれば。

若輩なれどプロとして、漫画の執筆で生活している身です。

その仕事を補助する藍野さんは、プロの仕事に携わっているということ。

彼女の作品が盗作されたというならば、私は全力で戦います。

これまでゴジラという作品を支えてくれた彼女が、アシスタントの方々が不当な損害を受けるというのなら。

黙つて見ていることは出来ませんし、望まないならば自分の意見を通す事はしません。

これが私なりの筋です。

佐々木さん、ご不満であれば次は法廷の場でお会いしましょう。

『あ、これは一步も退かねえって目だわ』

うん、退かない。

最初は流れで始めたゴジラの執筆。

でも、俺はゴジラが好きなんだ。

それに携わった人の描いた漫画を、好き勝手されたらやるしかないと。

これだけは絶対に譲れない。

膝から崩れ落ちる佐々木氏に、俺は怒りを視線に宿し続けた。

佐々木さん、これは私個人の質問です。

何故、貴方は「ホワイトナイト」を自分なりのアレンジを加えて出さなかつたのですか？

「…………」

読み切りを受けてもらわなければ後がない、それならば最初の持ち込みは理解出来ます。

しかし、その後も完全に藍野さんの画風を模倣し、佐々木さんのホワイトナイトを執筆しなかつた理由を教えてください。

「…感動、したんだ」

：

「ストーリーも、キャラ描写も、設定も構成も素晴らしいかった、感動し

たんだ！だからこれを世の中に見てもらいたくて

「それが、俺の使命なんだって、だから」

「ふざけんな！！！」

い、伊月ちゃん？

ああ、椅子も蹴つ飛ばして…

「世の中に読んでもらいたい!? 使命!? ふざけんな、誰が頼んだ！」

「私はホワイトナイトをこれ以上出さないと決めた、望んだものじやないと机の中にしまいこんだ…」

「でも！ 誰かが御託並べて好き勝手されていいなんて思つてない!!!」

あわわわわわわ、いかんよ伊月ちゃん暴力はいかんて。

『あつちや～』

「精々、私の後追いで満足してろ！ このプリンターメ!!!」

頭から湯気を出す勢いで、部屋から出ていく伊月ちゃん。

アツシーズ、悪いけど伊月ちゃんに飲み物あげて宥めといて。

佐々木さん、先ほどの内容で問題ないならば一度お帰りください。

詳しいことは、後々ということで。

一気に活力を失った佐々木氏を帰すと、編集者たちは下を向いて退室していくた。

「…迷惑かけたな」

菊瀬編集がすれ違いざまにそう呟いて、残ったのは俺と編集長…一応、幻覚。

正直このまま帰りたいんですけど、一応確認しなきやと思いまして。

編集長、盗作だつてこと分かつてたんじやありませんか。

「…なんでそういうの」

違うつて言つてほしかつたわーそう聴いてる時点でクロだわーいえね、コンクールの最優秀賞、それも自分のところが噛んでるものを出されたら顔潰れる人いるじやないですか。

だから暫く様子見してたんですが、一向に出てくる気配無し。

これつて、たぶん編集部だけじやないんじやないかなーって。

違うなら鼻で笑つてくださいよ、俺にミステリーは無理だつて割り切れるんで。

「…ゴジラの影響力が予想以上でさ、本誌や単行本の売り上げ凄いよね。アニメに映画もだ」

どうも。

「だけど他の漫画に対する興味が低くなつてゐるのを危惧した』偉い人

“がいるわけ”

「ゴジラに並ぶゝつていつて出した肝いりの作家も似たような結果、だから仕込みをしろつてうるさいんだ」

「菊瀬を外して新人つければ、経験の薄い君なら調子崩すんじやないかつて」

『うつわ、マジかよ』

ひええ…

「勿論、こつちだつて潰れられちゃ困るさ。今までの貯金があれば大崩れはしない、足踏みしてゐる所で他のをプツシユして整合を取る」

「そう考えて矢先に、彼が来たわけ」

会議中、警備員押しのけてでしたか。

もうちよいそこらへんを書く方に回してほしかつたなく

「実際凄い良かつたし、問題ないならそれでいこうつて話になつた…」
だけどそれが盗作だつて分かつた時は焦つたよ」

「そこを偉い人がご登場、関係者に手回しして読み切り枠で掲載、人気上昇万々歳」

「都合のいいスケープゴートの誕生というわけだ」

あーあーあーあーなんとも、闇が深い。

「娘がまだ学生なんだ、断れなかつた…のは言い訳だけど、どうするこのネタ」

勘弁してくださいよ、これで手打ちだと決めたんです。

…ところで、伊月ちゃんのご両親にも手回しました?

明らかに提訴するの渋い顔されたんですが。

「当たり、諭吉さんたんまり持つてつたらしいよ。結局受け取らなかつたみたいだけど」

漫画家なんて安定しない職業、親としては反対したかつたでしそうしねえ。

夢からさめて、別の道を：親心ですね。

本人には絶対に聞かせられないことを除けばよおし！

あーはいはい、世の中ブラックで逆に安心ですわ。

「どうする、今度はこっちを訴えるか？」

だから勘弁してくださいって、墓までもつてきますよ。

だけど流石にこのままつてのは無理なんで、今度の映画で一度切つて他誌で再スタートしますわ。

「上手くいくかねえ」

最悪は同人誌で自腹切れますんで。

まあ、アレですよ。

もし俺がダメでも、誰かがその人のゴジラを始めたのなら。自分の出る幕はありませんし、大勝ちつてことで。

んじや！ 来週分は新人クンに渡しましたので！

ひとり残される編集長は、ボリボリ頭をかいて。

「仕事するか…」

自分の作画と相手の作画

「あー、ムカつく」

炭酸飲料を飲み干して、自分の中の溜まつたものを吐き出した。
アシスタンントの先輩たちは色々とやる事があるらしく、私はこうして先生を待っていた。

「アイノさん…！」

そこへ来たのは、先ほど怒鳴り散らした佐々木という男。
いつぺんぶん殴つてやりたかったが、【意趣返し】は済んでいるので
気持ちを落ち着かせる。

「なにか？」

…語尾が強くなつたのは、私の未熟故だろう。

「…す、すまなかつた、俺は君のホワイトナイトを！」

「佐々木先生、やめてください」

これ以上聞くに堪えない、さつさと終わらせるのが吉だろう。

「ホワイトナイトの連載続行は、私から先生にお願いして条件に出してもらいました」

正直な所、裁判云々は必要ない。

私に必要なのは、この男への意趣返しによる「禊」だ。

「先程はああ言いましたが、私個人としては書いていない部分もよく
出来ていたと思います」

「ですから、私からホワイトナイトを【託そう】と思いました」

「…キツい言い方になつたこと、ごめんなさい——ホワイトナイト
をお願いします」

頭を下げて、背を向ける。

これで——佐々木哲平の漫画家としての人生は終わつた。

こちらに向ける視線：安堵、決意、謝意、何かは分からない。

しかし、彼は最後まで描き続けなければならぬ：『藍野伊月のホ
ワイトナイト』を。

途中で逃げ出すことは許されない。

自分を守ってきた建前が、それを許さない。

描いて、描いて、描き続けて。

貴方は【自分の作画】を見失う。

自分の漫画を描くことは出来なくなる、私の描いた漫画のコピーマシンに成り下がる。

自分でやつて反吐が出る、だけどそれくらいしないと気がすまなかつた。

私が危惧したのは、この一件で先生の執筆に影響が出ること。もし盗作であることを公表すれば、今後の連載に支障が出てしまう。

全てを丸くおさめるために、佐々木哲平が作者である方が好ましいのだ。

名誉なんてくれてやる。

利益だつて欲しければくれてやる。

だから潰れろ、盗作家。

バキリと、手の中の空き缶が潰れた。



『で、あのJK大丈夫か?』

そこなんだよねえ。

どんな形だろうとホワイトナイトが表に出た以上、書ききつて欲しい…と言われたのは驚いたけど。

暫く、休ませたほうがいいかもね。

実写は流れるかもしれないが、ウダウダ抱えるよりスッキリするか

『移動の理由はどうすんだよ』

ゴジラの作風がジャンプ掲載としてのニーズが合わない…辺りで誤魔化す。

恩義や義理もある、関係者には自分から説明しに行くよ。
しかし、ちよいと佐々木氏におつかぶせ過ぎたなあ。

『コピペ野郎に何言つても無駄じゃねえか』

だからってこつちが不義理していい理由にはならんだろう。
…あの場ではあえて流したけど、あれだけの完成度の原稿どうやつて手に入れたんだ。

コンクールに出したのよりもいい出来だつた、佐々木氏が手直しが
たというなら個性が出るはずなんだけど。

まるで、成長した彼女の書いた漫画を真似たみたいな…はは、SF
過ぎるか。

「先生ー！」

ああ伊月ちゃん、ごめんね気分悪かつたでしょ。

「もういいんですよ、この話はこれで終わりつてことで。それで映画
のシナリオはもう出来てますか？」

そう、だね…ねえ伊月ちゃん、正直な所、幻滅したんじゃないかな。
結局、何も無かつたで済ませたわけだしさ。

「今更ですよ」

だよねえ…未成年の高校生だ、これ以上トラブルに関わらせるより
はスパッと終わらせるべきと判断したけど。

自分でも薄情だとと思うよ。

「だから今更ですって。そんなに謝るなら毎週分のジャンプ代くださ
い！」

え、もしかして買ってたの!?

言つてくれたらあげたのに…

「毎週分は結構馬鹿になりませんからねえ、ちゃんと買うのがファン
です！」

…ありがとう。

頑張らなきやね、ファンがいてくれるなら…頑張ろう。

仕事納めは焼肉がいい

685箇所目の怪獣墓場

「速報」ゴジラとジャンプ決裂

686箇所目の怪獣墓場

あらー！？

687箇所目の怪獣墓場

えー！

688箇所目の怪獣墓場

えー！

689箇所目の怪獣墓場

マジかー

690箇所目の怪獣墓場

あららー

691箇所目の怪獣墓場

これ実写流れね

692箇所目の怪獣墓場

たぶん会社側で色々と言つてきそう

693箇所目の怪獣墓場

でも作者本人が結構投資して

694箇所目の怪獣墓場

理由はよ

はよ

作者

「友情・努力・勝利が主体となる少年ジャンプにおいて、ゴジラの作風
は暴力的過ぎる」

「今後は講○社の少年マガジンにて新シリーズを開始することが決定
した事をお伝えします」

「これまで応援して頂いた読者の皆様、関係者の方々に深くお詫びし

たい」

696箇所目の怪獣墓場

アニメ会社「じゃあ今後はマガジンとやるわ」

697箇所目の怪獣墓場

ゲーム会社「ゴジラのゲーム作らせて（はあと」

698箇所目の怪獣墓場

グッズ会社「もつと他にも作らせて」

699箇所目の怪獣墓場

集○社「あげません！」

700箇所目の怪獣墓場

うるせえ、買わねえぞ！

701箇所目の怪獣墓場

ホワイトナイトはあるし

702箇所目の怪獣墓場

ゴジラが強すぎて他のが霞む、漫画雑誌を殺す作品だ

だからゴジラ専用のを作ろう

703箇所目の怪獣墓場

ツンデレ乙

704箇所目の怪獣墓場

作者、二次創作歓迎してるもん

705箇所目の怪獣墓場

ぼくのかんがえたさいきょうのかいじゅう のサイトにも出没するらしい

706箇所目の怪獣墓場

???「いいの出来たらＨＰか葉書で投稿よろしく！」

707箇所目の怪獣墓場

MAD見て爆笑してるんだよなあ

708箇所目の怪獣墓場

映画予告見たぞ！

709箇所目の怪獣墓場
ゴジラ、死す

710箇所目の怪獣墓場
最強の敵現る！

711箇所目の怪獣墓場

たぶん読み切りで出てたアレかな

712箇所目の怪獣墓場

ネタバレ禁止！

713箇所目の怪獣墓場

そういうのは考察スレでやろう

714箇所目の怪獣墓場

実際の所、他誌移動はありだと思う。

マガ○ンは長期連載作品の完結が続いたから、そこに上手くはまる
んじゃないかな

715箇所目の怪獣墓場

エログロに期待

716箇所目の怪獣墓場

作者ならやるという期待

717箇所目の怪獣墓場

なんだかんだでメカの造形いいしな、スーパーXシリーズいいぞー

718箇所目の怪獣墓場

X1：弁当箱

X2：ター○ル号

X3：期待

719箇所目の怪獣墓場

モゲラがイイ線いつたんだけどなあ

720箇所目の怪獣墓場

宇宙人のメカゴジラVS地球人のメカゴジラ
ファイツ！

721箇所目の怪獣墓場

キングギドラもつかい出してくんないかなー

722箇所目の怪獣墓場
ゴジラは特撮だから盗作だ

723箇所目の怪獣墓場

(特撮) 出来てねえんだよ!

724箇所目の怪獣墓場

あつたら見てるんだよなあ

725箇所目の怪獣墓場

ちくわ大明神

726箇所目の怪獣墓場

誰だいまの

◆◆◆
えーでは、マガ○ンへの移動成功＆菊瀬編集と新人くんの転職成功
を祝いましてかんぱーい

「「「「かんぱーい！」」」

恒例となつた焼肉屋にて、アツシーズと菊瀬編集に担当してくれた

新人くんを呼んで祝うことになつた。

今更だけど良かつたの？ こつちとしては助かるけど。

「あいつらの面を拝まずに済むなら万々歳だ、やり甲斐のある仕事も
な」

「ゴジラ迷惑かけた分、少しでもお返ししたいんです！ あと近くでゴジ
ラ読みたい！」

ううん、編集者の極みい

とりあえず付いてきてくれたアツシーズにも感謝を。

というわけで肉食つて飲もう。

「タン塩！」

「豚トロ！」

「上口ース！」

「あ、烏龍茶くださーい」

おうアツシーズ、後輩の謙虚さを見習え。

『お前らだけずりいよ…』

所詮は幻覚よ…

『うるへー！』

おつと、そういうえば皆には話してなかつたけど月刊誌にも出す話が
出てるんだ。

そこで外伝としてモスラ、ガメラを書こうと思つてる。
で…だ、一榤だけ読み切りとして推薦状を貰つちやつたわけなんだ
けど。

出したい人、いる？

「「「ガタツ」」」

おーけ、みなまで言うな。

珠玉の読み切り、見させてくれな。

最後までやるのが筋だ

連休で家に籠つてゐる伊月ちゃんの様子を見に来たんですが。

『なにこれ、オーラが出てる』

うん、なんかこう濶んだダークなオーラが部屋の前から漏れ出てるよ。

周りに人がいなかだけ確認。

それ、ピンポーン。

伊月ちゃん、生きてる、よねー（汗

『救急車呼ぶ準備だけしつくか』

「あーい」

生きてはいるようだ、ゾンビみたいな声してるのでしつれーします。

⋮

……え、ここJKの部屋だよね？

『うつそだろ、最低限の家具しかねえぞ』

ミニマリストでござつたかー

伊月ちゃんは…あらら、なんて色氣のない格好で突つ伏してゐるんだか。

ちよつと一嫁の貰い手無くすわよあんた！

「そのときはせんせーもらつてくださいよー」

馬鹿言つてないでほら、牛丼買つてきたから食べなさい。

「どはん！」

モリモリ食べる伊月ちゃんを横目に、書きかけの原稿を覗く。

うん、相変わらず流石の書き込み料。

Gペンじやなくて、ペンタブの方がよくない？

『紙とインク代も馬鹿にならねえしなあ』

「いやー慣れてる物が一番いいというか、中々切り替えられなくて」

そこは個人の好き好きだしねえ（バラバラ

あーやっぱり怪獣漫画に近いか。

「う、マズイでしようか」

いやいや、他のアツシーズもこんな感じだしね。

：最近思うよ、描きたい漫画と売れる漫画は違うつて。

今更別方向に一つてのは、うん、無理だね、勇気が出ないや。

「——先生、どうしてガメラやモスラも描こうつて気になつたんですか？」

いきなりどしたの。

「だつて先生、考案やネタ帳だけでそれ以上描こうとしなかつたし、なんでかなつて」

……出てきてくれないかなあつて。

「誰がですか？」

原作者。

「原作者つて、ゴジラの!? 居るんですか！」

『いるぜ！ 別の世界にな！』

いやまあ、うん、そうね、うん。

いるなら、知つてるなら、名乗り出て、教えて欲しいんだよね……名前。

分からなんだ、これが。

肝心の名前を聞こうとしても、ノイズが走つて分からなくなる。キーボードやら絵の頭文字、果てはモールス信号まで試した。

なのに、何故か途中から認識出来なくなる。

他の人に頼んでも同様、まさしくオカルトだ。

盗作扱いなら、それでいい。

裁判だろうがなんだろうが受けるべきさ。

これ以上、このコンテンツを自分のオリジナルだと言い張るのは、しんどい。

佐々木さんの事を私はどうこう言えないんだよ。

私は：私たちは幽霊ゴーストと書き手ライターなのだ。

名誉を独占するのは、許されない。

『…』

「もし、もし現れなかつたら、どうするんですか」

事実を公表しようかなあ、あはは連載ストップで漫画界追放かも。

「それはダメですよ」

ダメかな。

「ダメです」

どうして?

「だつて【ゴジラを実写化】してないじやないですか」

「先生が言つたんでしょ、夢は実写化だつて」

「筋を通してください、最後までやりきつて作品に向き合う…それが

先生の責任です」

筋、か。

そうだね、うん。

書ききるのが、筋だ。

ねえ伊月ちゃん、こんな感じに言われて恐縮なんだけど。

「はい！」

ウルトラマン見たでしょ？ たぶんアレが最有力だわ悪いけど。

「んぎゃー！」

作業机に突つ伏す伊月ちゃんに、めんごめんこと。

筋、うん、筋だ：ちよつくら、様子見に行くかね。

今週号の、読者人気が下がつたホワイトナイトのジャンプを手に取る。

一度、本気で話してみよう。

いきなり消える奴がいるかよ

見つけるのは苦労しなかつた。

集英社からの帰りか、日が傾く中で相対する。

コケた頬、目の下の隈は深く、明らかに生気の感じられない表情。

どうも佐々木先生、コーヒーでもどうです？

近場の公園のベンチで、缶コーヒーのプルタブを開ける。
なんとなく暖かいというよりはぬるいって感じ、寒くなれば変わ
だろうか。

「…何の用、ですか。連載はまだ」

ええ、拝見させて貰いました。

技量云々ではなく、単純に興味を惹かれない。

アレが、貴方の「ホワイトナイト」なんですね。

「ツ…」

我ながら嫌な言い方だ、正直自分でもどうかと思う。
だが、たぶん、今を逃せばきっと聞けないだろう。

あえて問わなかつた疑問を、投げる時だ。

佐々木先生、「ホワイトナイト」の原稿を「参考」にしたのではなく、
「模写」したのだと確信しました。

どうやつて手に入れたんですか、その、本来書かれてないはずの「藍
野伊月」さんの作品を。

ベンチに座り、暫くの間空き缶を見つめ続ける佐々木氏。

…実はですね、私も0からゴジラを生み出したわけではないのです
よ。

互いに執筆の秘密を抱えている同士、暴露もまたアイデアの一つで
はありませんか？

沈黙から数秒、あるいは数分、夕焼け空に黒点となる鳥の鳴き声だ
けがBGM。

「タイムマシンだよ」

ほう？

「落雷で電子レンジがタイムマシンになつて、未来のジャンプが出てきたんだ」

「それでホワイトナイトを読んで、俺はそれを模写した」

「……もう出てこないけどな」

壊れたのか、壊したのか、判断はつかないが。

タイムマシン、なるほど面白い。

未来からの贈り物、つまり現在…未来からの過去を観測する存在がある。

うん面白い、これはいいネタだ。

某潜入ゲームにもあつたが、過去を変えたことで未来が変化するタイムパラドックス！

今度使つてみよう…どうしました、そんな驚いた顔して。

「信じるのか…？」

疑つてどうするんです、しかし面白いですね是非読みたかつた。ホワイトナイト以外の作品も気になりますね、おっと今度はこちらの番だ。

そして語る。

自分にしか見えない幽霊の存在。

そこから得た情報を基にゴジラを描いたこと。

別の誰かが作つた話を、自分のものにしたゴーストライターであること。

どうです？ 私も大して変わらな…「自慢かよ…」はい？

「なにが幽霊だ！ ただ、ただ自分の『想像』から生まれたのなら、それは自分のものじやないか！」

「あんたに分かるのかよ！ 才能のない俺の気持ちが、あるあんたに分かるのかよ！」

「特定のジャンルに逃げるだけなのに、それも出来ない俺は哀れか！ ふざけんな！」

空き缶を地面に叩きつけ、走り去る佐々木氏。

それを見送る自分。

自慢？ 才能？

……ああ、なるほど、そう捉えられる所もあるのか。

俺は何がしたかったんだ？

ただ秘密を吐き出したかったのか？

同類だと思い込んでいた彼に、糾弾してほしかつたのか？

…………馬鹿馬鹿しい、何もかも自分勝手が過ぎる。

『ゴジラが見たかつた』

幻覚…？

『好きなんだ、子供の頃に見てからずつと…でもこっちには無かつた』

『誰にも知覚されず』

『誰にも干渉できない』

『そんな中で、ただ一人だけ声が聞こえるやつがいた』

『そいつを通して、世界が見れた気がした』

『そのための手段に、大好きなものを利用した』

『違うんだ、俺は作り手なんかじゃない』

『ただかつてあつた世界への縁を求めて…』

『その為だけに、大好きなものを勝手に使つたんだ』

『でも、それでも俺は——』

風が吹く。

空気を切り裂く音が、鼓膜を叩き、咄嗟に目をつぶつてしまつた。

聞こえない、煩わしいと思つていたあの声が。

見えない、顔もあやふやな半透明の物体が。

消えてしまつた。

おい幻覚…おい。

語りかける声は虚空に消え、返す者など何処にもいない。

なんだよ、いきなり現れたくせに。

まだ、望みが叶つていないので。

いきなり消えるやつがいるかよ。

とりあえず、見ますお隣さん

625体目の人類の敵
えがつた：

626体目の人類の敵
えがつたわあ：

627体目の人類の敵
監督の拘りとキャストの熱演もえがつた：

628体目の人類の敵
ゴジラの着ぐるみ超欲しい

629体目の人類の敵
それな

630体目の人類の敵
ほんそれ

631体目の人類の敵
わーお、海外でも大反響

632体目の人類の敵
今のは時代の技術を総動員して作られたゴジラやぞ！

633体目の人類の敵
これは波が来るで工藤！

634体目の人類の敵
駄作も増えるつてことだぞ工藤！

635体目の人類の敵
なにそれも味がある

636体目の人類の敵
え？

〔悲報〕 作者ハリウッドシナリオ協力断る

637体目の人類の敵

638体目の人類の敵
なんで！

639体目の人類の敵
あーほんまや、結構騒いでる

640体目の人類の敵

ハリウッド「ゴジラ作らせて?」

作者「ええで」

ハリウッド「シナリオ作つて?」

作者「嫌や」

ハリウッド「!」

641体目の人類の敵

「ゴジラというコンテンツをアメリカの映画会社が造るというのなら、それは私が手がけるべきではない」

「私は日本のゴジラを作りました、アメリカのゴジラを作れるのは皆さんだけです」

「楽しみにしています」

642体目の人類の敵

これは、挑発?

643体目の人類の敵

というより激励やろ、自分で作るんやつたら自分でキッチリ作れ
やつてことや

644体目の人類の敵

いけるいける、ジユラ〇ツクパークも出来たし!

645体目の人類の敵

最初以外パツとしないシリーズなんですがそれは

646体目の人類の敵

集〇社涙目wwwうえwww

647体目の人類の敵

アレはしやーない。

648体目の人類の敵

これからが大変だぞ!

649体目の人類の敵

アニメ映画だけでも三つある!

650体目の人類の敵
そこからアニメ版をピックアップや！

651体目の人類の敵
グッズ買い占めなきや

652体目の人類の敵
出たなテンバイヤー！

653体目の人類の敵
恥を知れ恥を！

654体目の人類の敵
急報「作者倒れた」

655体目の人類の敵
は？



「盲腸ですね」

はあ、盲腸。

実写映画の上映開始から暫くして、インタビューを受けていたら突然の腹痛。

食い合わせが悪かつたのかと冷や汗を流していると、医者から告げられた事実。

盲腸、具体的にどういうものかは知らないが滅茶苦茶痛かつた：：
薬で炎症を抑えてから手術をするらしい。

いやあーアツシーズ、すまんね心配かけちゃって。
「勘弁してくださいよ…」

「寿命縮みましたわ」

「いやあ、でも救急車つて初めて乗りましたよ！」
「仕事道具持つてきました」

「働けと申すか！」

いや、まあ、暇つぶし的に描くのは有りか。
「おつと、先生コレ！」

え、なにこのブルーレイ。

「特別についてことで、実写ゴジラ焼いてもらいました！」

わーお。

ありがと、暇になつたら見るよ。

⋮

……暇になつちやつたなあ。

「だからさー！もう行けるつて！ゴジラ見に行かせてよ途中から記憶切れちやつて気になるんだつてばー！」

なんだ、この聴き慣れた声は⋮

病室の扉が開け、車椅子を押された青年が入つてきた。

互いに視線を交わし、特に語ることもなく。

とりあえず、見ますお隣さん。

「おう、頼むわ」

『ギャーンゴーン グワワーン』

・